

第14回 アンパイアスクール報告

- 実施日 平成25年12月7日(土)、8日(日)
- 講習会場 JR東日本グランド(柏グランド)、クリアビューホテル(野田市)
- 主催 全日本野球機構(NPB)、全日本野球協会(BFJ)
- 受講者 64名
- 講師 プロ・アマから10名+補助講師3名(別紙参照)
- 講習会協力校 中央学院大学

1 準備体操・ストレッチング、基本動作、Go-Stop-Call(山口講師:BFJ)

◆ 球審及び塁審のジェスチャー

- (1) 「アウト」: 右手の肘を頭の後ろまで上げ、前面の机の物を叩き潰すぐらいの気持ちでやらないとジャッジの切れは出てこない。全面の壁をノックする程度は古い。肘は高く、力強く振る。拳はあまり握りすぎるとアウトが完了した時に震えて格好悪い。
※ 左手は体の横に置く(従来のお腹の前に畳み込むことはしないで良い。)
※ 際どいプレイで観客はどっちだ?と判定を期待しているときは、パンチングアウトも必要(麻生委員長からもOK!と了解を得て練習した。)
- (2) 「セーフ」: 両手を広げたとき低くならないように、手の先に力を込めきれいに見せる。セットポジションからしっかりと立ち上がる。広げた反動でゆっくりと戻す。
尚、コールは「セ〜・・フ!」と間を伸ばさないこと(桑原講師)。
- (3) Go-Stop-Call: 「左にGO、右にGO、前にGO、後ろにGO」と講師の掛け声に合わせてスタートを切る練習を行った。顔は必ず正面を向き視線を落とさない。行く方向の足から必ずStepする(この練習が2人制の判定に生きてくること、後に判りました。)
- (4) NPB 育成審判員のデモンストレーション(平林講師:NPB)
全力で走って止まるGo-Stop-Callを披露。それでもプロは隊列が乱れない。
受講生も全力で走って止まる練習をしたが、見事に列がバラバラとなる。手を振らないと走り方が格好悪くなると指摘を受ける。

2 投手の投球動作「ボーク」に関する説明と球審の構え方(小山講師:「Justice 小山」と麻生委員長から呼ばれていた。)

(1) 投手の投球動作「ボーク」

- (ア) 24年度のルール改正点の復習、ワインドアップ、セットポジションについて
- (イ) 走者をだまし、盗塁ができないゲームが横行するとbaseballはつまらなくなる(両手を必ず胸の前で止め「フェアな状態」をつくること。)
- (ウ) 最初の動作で自由な足を塁へきちんと踏み出す以外は認められない。当然膝(ヒザ)を折った後牽制した場合もボーク。
- (エ) ただし、最近の投手板の前線にはラバーが入っていたり、掘れて穴が開いたりするので、軸足を自由な足のステップと同時にその場所で踏みかえる(一挙動であること)ことは認めて

いる(軸足のスライドは絶対ダメ)。

- ① NPBでは、自由な足をステップすれば軸足の移動があっても一挙動でけん制されたと思なしボークを適用していない(井野審判長)。

(2) MLBで今年から採用された三塁走者への偽投について(麻生委員長)

(ア) 26年度から日本も採用することで検討している。

- (イ) 軸足をプレートに触れて3塁方向へステップして1塁へけん制することは、もうできなくなる(軸足を外せば投手でないので偽投はOK)

(3) 平林講師から補足

- (ア) けん制球にはステップが重要。しっかりとした距離(歩幅)と方向(足の向き)が大事。
スライドステップ(踏み返え)や踵だけで回るクイックターンステップは厳罰に処置する。
- (イ) しっかりと足を上げステップすることが基本(足を上げて元の場合に降ろすものはStepではない)。
- (ウ) ルールブックの抜け道をつくらない。

▶ ある少年野球の試合より、走者投手1塁のとき投手は素早いけん制を一塁に投げた。その後走者がユニホームの泥を払っている隙に打者に投球した。この投手だけやっているのかと思ったが別の投手も、又同じことをした。その連盟審判員にこのプレイについて質問したところ、「打者が準備できていないときに投球することは禁じられているが、走者が準備できていないときに投球することを禁じる規則はない。」とのことであった。皆さんの見解はいろいろあると思うが、僕はフェアでないため投手には止めるように注意します(と平林氏は言われましたが、皆さんはどう思いましたか?)

(4) 井野審判長から補足

- (ア) BALK「ボーク」とは、だます、おとし入れる。とか良い意味がない。
- (イ) 規則8.05には13項目もある。
- (ウ) セットポジションとは、軸足をプレートに付けて自由な足を前に置いたときである。このときからルール適用が始まる。両手を前面で止めたときは、セットポジションの完了であり、ルール適用の時期を間違えないように!

(5) 質疑応答「11月の総会でもありました、投手のクラウチングスタイルの件がありました。」

- Q: クラウチングスタイルから捕手のサインを見た後、上体を起こしそこで止まってしまった、又再度サインを見直した。これはボークか?
- A: (NPB 井野審判長) ジャイアンツの榎原投手は視力が悪いので良くこれをやった。2月のキャンプでコーチも交えて見直すように指導したが、公式戦で改善されなかった。そこで、走者3塁のときにボークを宣告した。それから、この癖が改善された。
- A: (桑原講師) アマチュアではその行為により走者が不利益を得たり、故意に打者や走者を混乱させていればボークを宣告するが、単なる癖やその後のプレイに影響がなければ認めている現状がある。しかし、好ましい行為でないので、止めるように指導する。
- Q: 両手をセットする位置を走者の位置により代える投手がいる。
- A: 体の全面であればセットする位置はどこでも良い。頭の上でセットすることは認められていない。しかし、高野連と全軟連では一試合を通じ同じ位置でセットを完了するように指導されている。

(6) 球審の構え方

- (ア) 捕手の踵(かかと)にきちんと近づく(Heel・Toe・Heel)⇒NPB プロも同じ
- (イ) スロットスタンスが基本(アマチュアでは推奨)
- ① 打者と捕手の間に入る(捕手の打者側の耳よりも顔を打者側に合わせる)。この構えをすることで、打者側でない腕(右打者なら右腕)が捕手の真後ろになるため必然的に守られる。
 - ② 捕手が内角によっても、原則は打者と捕手の間に入る。どうしても見えないときは捕手の頭の上から見る。
- (ウ) スロットフット(右打者なら左足)のつま先は真直ぐ投手に向ける。トレルフット(右打者なら右足)を45度程度開くが、体は投手に正対するように構える(ホームプレートの投手寄りの面を利用すると体の面が投手に平行となる。)
- (エ) 球審の顎(あご)は、捕手の頭頂部より下げない。

3 2人制の基本動作の「デモンストレーション」(平林講師: NPB 育成審判員)

(1) 走者なし(内野ゴロ)

- (ア) 1BUは一塁ベース後方のファールエリアに位置
- (イ) ゴロが打れたら打球方向へPLはスタートして内野手が捕球したら、45feet前進してラインキープ(しっかりとファウルラインをまたぐ)する。
- (ウ) 1BUは、送球の獲捕を確認して「He's Out!」

(2) 走者無し(外野フライ)

- (ア) ポーズ、リード、リアクトにより、BUが打球を追うか?内野に入るか?決める。
- (イ) イージーフライは打球方向にスタートしてPLが打球判定する。ただし、ダイヤモンド内から出ることはない。
- (ウ) トラブルボールは、BUがGoing-Outして打球判定する。
- (エ) BUがGo-Outしたら1塁・2塁・3塁の判定は全てPLが行う。
- (オ) BUが打球判定のため、Going-Outしても本塁のプレイはBUが受け持つ。
- 2人制のコミュニケーションは声で行う。塁審が「ゴアアウト」と発声し打球を追ったら「OK!」とアンサーを必ず行う。ランダウンプレイが始まって、PLが1塁や3塁に到達したら「走者OK!」や「半分OK!」とコールする。これが意外に難しい。

4 打球判定練習

(これより各班毎の講習となりました。4班の講師は、BFJ 桑原さん、NPB 平林さん、補助講師はNPB 長川さんでしたので、4班の話が中心になります。)

- リラックスして打球を待ち構えられるように微調整する(構えが自分にとって快適か?)。⇒打者側の反対の腕(右打者なら右腕)はカメラの三脚と言われるが、つっぱったり、無理に体に引付けたりするのでなく、親指と人指し指で膝を挟む以外は自然に構える。
- コールは、ストライク(ワン・ツー・スリー)、ボール(ワン・ツー・スリー・フォア)であった。ストライクやボールのみしかコールしないのはプロでもベテランと言われる審判員のみ。しかし、3ストライク目は「ストライク・スリー」と発声しオーバー・アクションになる。
- スリーストライクコンテスト(オーバー・アクション)は今後大学・社会人大会等でも取り入れ

ていくようである。国際試合では一般化しているため。

- BFF では、ストライク・スリーと言ってもプレイが動くことがあるので、アマチュアはプロのように横を向かず必ず顔は投手に正対しておく。射抜き(右手を引く)ぐらいのポーズが適当ではないか。とのこと。左打者のときは、右足が前に出ているので右手を引くことは投手に正対しているから難しいため、顔は投手に向けたまま左足を開いてそこから射抜きするとよいかも(山口講師)。

- ハーフスイングしたときは、打者側の腕でポイントし「Yes, he Went」とコール。

(ア) あまり振ったというジェスチャー(右手を回す)はしない(NPBの意見)。

(イ) アマチュアは打者側の腕でポイントし、「スイング」とDeclareすることで良いのでは。

(ウ) 捕手からのリクエストがあったら、「Did he go?」「Check swing」「振った?」と意見を求める審判員に踏み出して、必ず左手で指差して聞くこと。マスクはしたままで良い。

(エ) 打者がハーフスイングして球審が「ボール」と判定したが、リクエストの判定で「ストライクになったとき」(判定が覆ったとき)、

 - ① 打者がハーフスイング(どっちだ?)
 - ② 打球判定の「ボール」と振ってないという「ノースイング」の2つをDeclareする。
 - ③ 捕手からリクエストあり、1塁BUに「Did he go?」
 - ④ 1塁BUが「Yes, he went」とCallし「ストライクのジェスチャー」をする(このとき、ホームへ1歩近づくBUがいるが動く必要はない。)
 - ⑤ 投手に正対し、PLは「今の打球をストライクにする」として、「That's a strike」とCallし右手で「Strike」のDeclareを行う。
 - ⑥ ボールカウントを「One ball, Two strike」とCallしながら指で表示する。
- 打球判定のCallは、「Play:プレイ」から全力で!「Ball」判定も大きな声でDeclareしていた。
 - プロの若手(3年目以下)の方は、大きな声でボールカウントをコールしていた。非常に好感をもてた。
- リラックスは2歩引き。足は揃えない(起立のポーズはしない)。
- コールの間(ま)は、トラッキングするからできる。打球を目だけで追い、捕手のグラブを見て捕球を確認し、最後に(頭の中で)軌道を再確認し、そして「コール」。この間を講師からしっかり教えてもらったことで今回の研修の価値があった。

(ア) 今回の打球判定練習は、バッティングマシンを使って行った。最初、ボールが中々来なくてコールが早くなって戸惑ったが、桑原講師の模範指導で、間隔を理解できた。

(イ) 今日は実際のゲーム中の打球精度を競う練習でない。しっかりとボールを呼び込み捕手のミットを見て、コース・高低を再確認し、それからコールすることに意味がある(5秒くらいの間があるような間隔で取って行った。)
- 打球判定で「ストライクか・ボールか」迷う打球は1試合で数個である。きわどいコースを「ボール球」として大きな声で「ボール」と判定するなら積極的に「ストライク」にしていこう。これがゲームマネジメントとスピードアップに繋がる(NPBもこれを積極的に取組んでいる)。
- 古江が直接指導されたこと。

(ア) トラッキングができていないが、打球をコールするときに捕手のミットから目を切っている(桑原講師)。

(イ) 捕手の返球が完了して次の打球に備えるときの打者側の足は、一発で(スート)入ること。

(ウ) 上体の向きを(平行を)意識するあまり3塁方向を向いているときがある、ホームプレート

の全面を利用して構えると良い（平林さんと1対1で直接指導を受けられ感激）。

(エ) ド真ん中やあきらかに外れているときのコールが早い。常に、投手の指先からボールを引っ張るようにトラッキングすることに心掛けること。ベース周辺から捕手のミット間（投球の最後）だけトラッキングしているときがある（長川講師）。

(オ) ストライクコールのとき捕手が投手に返球する際に、捕手の投げ手と PL の右手が当たるときがある。何が悪いのか（NPBの長川さんに質問すると）。

- ▶ 捕手のミットを見てコールしていると、捕手の手が出てきても避けることが可能となる。捕手が2塁へ送球したとしても体を開いて避けることも可能。投球判定してコールの際に目が投手に向けているから当たる。決して捕手に近すぎるから起こるのではない。私はヒール to ヒールよりさらに半分捕手近づいて構えているが、当たらない（実際にやってもらいました。）。

(カ) 投球練習のラストスロー後にホームプレート履き、打者席の後方へ移動するときには、投手を見ながら移動すること（常に顔は投手に向けて置くこと）。

● 夕食後の座学後の懇親会にて、BFJの山口講師から

(ア) 今日のGo-Stop-Callの練習で取り入れた、「左へgo・右へgo・前へgo・後ろへgo」を是非地区に帰ってからでもやってほしい。審判員はともすると、左足からスタートして止まるときも左足を軸に右足を開いてハンズオンニーするだけと思っている。プレイが起こる方へ体を向けなければならないため、見る方の足から1歩目のステップ（これを「リードステップ」という。）を行うように身に着けてほしい。

(イ) 基本動作の練習で、「アウト」と「ストライク」の練習をやったがどちらも基本は同じであることに気づいていたでしょうか？投球判定の際にスタンスを取った後、突っ立っている審判員が多い。投手がプレートに付いたら、Hands on knee セットポジションを取って投球がいつ来ても良いように準備してほしい。それから、投球動作に併せてGet Set（打者側の手を腹に持ってくる）する。最後に左打者でも腹に抱えた手（左手）は横に降ろして「ストライク」とコールするとジャッジが力強く大きく見える（見栄えが良い）。

5 外野への打球判定（2人制：フィールド）

(1) 外野の打球判定

(ア) 4人制のようにすぐGoing-Outしない。外野手の動きを見て、イージーフライか？トラブルボールか？野手の動きを読んでからInfieldに切込むか、Going-Outするか判断する。ボールをずーと目で追っついてはダメ。

(イ) 野手の動きを読んでトラブルボールと判断したらGoing-Outし、打球が落ちてくる5m程度手前になったらStopして判定（Look）する準備を行う（慣れないと難しい）。

(2) 内野への切り込み

(ア) 外野飛球がイージーフライや長打のヒットと判断したときは、1BUはピボットターンを行い素早く内野に切込む。

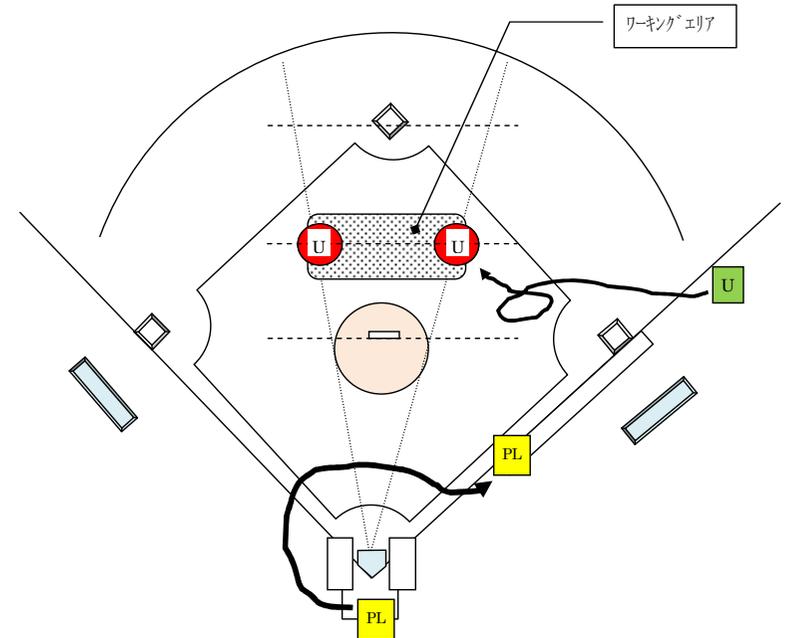
(イ) ピボットターンは4歩目（左・右・左・右）の右足を軸に1塁に正対し打者走者の触塁（動きを止めないで「ちら見」程度）を確認する。複数の塁の触塁を確認するときは、首を振って“見たよ”と印象付けすることが大事。

(3) ワーキングエリア

(ア) 走者1塁、1-3塁のときは、二塁手前のエリアに位置する。

(イ) 走者1-2塁、3塁、2-3塁、満塁のときは、遊撃手前のエリアに位置する。

(ウ) 触球等のプレイが起きる場合にはその塁に最適な位置で判定するが、他の走者がいる場合には次のプレイが起こることを想定して、このエリア間（ワーキングエリア）を基本的に移動するがここから大きく出ることはしない。



※ BUの位置は、本塁とマウンドの右端を結ぶライン延長線上をまたいで、かつ投手板と2塁ベースとの中間地点に位置する。

6 内野ゴロ等の判定（2人制：室内練習場）

(1) 走者1塁（BUは二塁手前）

(ア) 盗塁のときの1歩目は右足を二塁方向へ引く。後三步でしっかりと二塁に向きはセットポジションで判定する（4歩で移動）。

(イ) 一塁二塁間でランダウンプレイが起きたら、PLが来るまでBUがすべてのプレイを受け持つ。ランダウンプレイで、走者に守備側の野手が触球したらタッグプレイの位置を左手で指差し「On the Tag」とコール。次に野手のボール獲捕を見て「He's Out!」とジャッジ（高野連では指差しをしませんが、タッグ＝アウトの確定でないため非常に合理的であると感じました。）

(ウ) 内野ゴロで6-4-3や4-6-3のダブルプレイが行われたときは、打球方向の足（SSゴロなら右足、2Bゴロなら左足）を踏み出し打球処理を確認する。そして、二塁に送球されたら2塁に正対しピボットプレイをスタンディングで判定し、すぐに体の向きを変えて一塁のフォースプレイをセットポジションで判定する（球審は45feet前進するがあくまでも補助）。

- すごく BU は余裕がありません。二塁判定しながら一塁を向くくらいでない間に合いませんでした。

(2) 走者 1-2 塁 (BU は遊撃手前)

- (ア) 2 塁走者の前に BU が位置することとなるが、走者の要望で二塁手前には移動しない。
- (イ) 内野ゴロで 6(5)-4-3 のダブルプレイでも「一塁フォースアウト」の確認も遊撃手前からセットポジションで判定する。実際にこのエリアから判定したが、1 塁までの距離が遠く、角度的に一塁手のベースを踏んだ足が離れも見えにくいので不安になる。
- (ウ) 二塁三塁間でランダウンプレイが起きたら、PL が 3 塁へ上がってくるまで BU がすべてのプレイを受け持つが、1 塁走者へのランダウンプレイが始まったとき、PL が一塁へ上がってしまうと 2 塁走者が三塁へ盗塁した場合のプレイにも BU が担当するためマウンド付近まで引いてすべてのプレイが見えるように判定しなければならない (非常に難しい)。
- (エ) ランダウンプレイが始まったら、①ラインアウト ②走塁妨害 の 2 点が起ると頭の中にインプットする。通常、守備妨害が起こるケースが少ない (NPB 西本氏)。さらに何度かあったが、A 審判が「ノータグ」を宣告しているのに、B 審判が「ラインアウト」と宣告して判定を覆してしまった。これは B 審判の越権行為でありトラブル発生の基となる。

7 本塁周辺のプレイ (室内練習場)

(1) 走者 1 塁のとき二塁へ盗塁。このとき打者が捕手の守備 (送球) を妨害した (6.06 c)

- (ア) 宣告する言葉を日頃から練習して、いつでも言えるようにしておかないといけない。
- (イ) 投球判定、インターフェアーを左手でシグナル、二塁のセーフを確認したら、タイム。
- (ウ) タイムの掛けるタイミングを逃さない。
- (エ) 打者に「守備妨害でアウト」、走者を「1 塁へ戻す」。マスクを取ってはつきり Declare。
- (オ) 三振の場合は、妨害プレイの対象となる走者がアウトとなるため、その走者に向かって「打者の妨害行為でアウト」と Declare し、攻守交代になるケースもあるので「マイク説明」も必要となる。

(2) 走者 1 塁のとき Balk の投球を打者が打って内野ゴロとなった。

- (ア) タイムを掛けるタイミングを間違えない。打者が飛球を打ち捕らえられた時点、走者が進塁する塁でアウトになった時点で、「タイム」となる。
- (イ) 走者に 1 つ塁を与え、打者には打ち直しを通告。さらに、ボークの投球はノーカウントとするので、しっかりとボールカウントを記録に示す。アマチュアの投球当時は、投手板に位置したときであるため、進塁の起点を間違えないようにすること。
- (ウ) タイムを掛けたら、再度投手に「That's a balk」を Declare する。それから、走者を進め、打者に打ち直しを通告するが、球審のみとか塁審のみとか一方の審判員に任せきりにしないこと (二人で指示すること。これをエコーするといいます)。このプレイには監督の選択権は生じない。
- (エ) 走者 2 塁で Balk 投球が死球になったときは、Balk ルールが優先される。当然監督は「死球の打者がなぜ! 1 塁に進めないか?」と抗議に来るが、これは打者当り損のルールのためしつかりと説明して納得を得ること (走者 3 塁で、Balk 前のカウントから再開)。

(3) 打者と捕手の偶然の衝突 (ナッシング)

- (ア) バッターボックス周辺に限られる特殊なケースとして理解しておくこと。
- (イ) ダートサークル内なら適応 OK! はあり得ない。

- (ウ) ナッシングはインプレイなため、「ナッシング・ナッシング」連呼してプレイが止まらないようにすること。

(4) 打者がバンドして捕手のプレイを妨害した (守備妨害)

- (ア) 守備妨害は即ボールデッドにする。タイムを掛けながら状況を頭の中で整理する。
- (イ) 打者走者に「守備妨害でアウト」、走者を投球当時に占有していた塁に戻す。

(5) 打者がバンドしたとき、捕手が走者の進塁を妨害した (走塁妨害)

- (ア) 打者がバンドして 1 塁へ走ろうとしたとき、捕手が打者を押し倒したようなケースが「走塁妨害」であり、打者席から動かず三塁線のゴロを捕手にプレイさせなかったものは、打者席に居ても「守備妨害」の対象となる。混同しないように!
- (イ) しかし、守備優先といっても打者を押し下り本塁上に飛び出したりして打者走者に走塁させなかった PL が判断したときは、「走塁妨害」が適用される。
- (ウ) 走塁妨害も即ボールデッドとする。他の走者は妨害が発生時に占有していた塁に留めるか、すでに次の塁付近まで進んでいる場合があるため、PL に確証がないときは他の BU に走者の位置を確認して走者に宣告すること。

(6) 走者 2 塁のとき、打者が外野にヒット打ったが、2 塁走者が本塁に通過する際にボールを持たない捕手が走路塞いで得点できなかった (捕手のオプストラクション)。

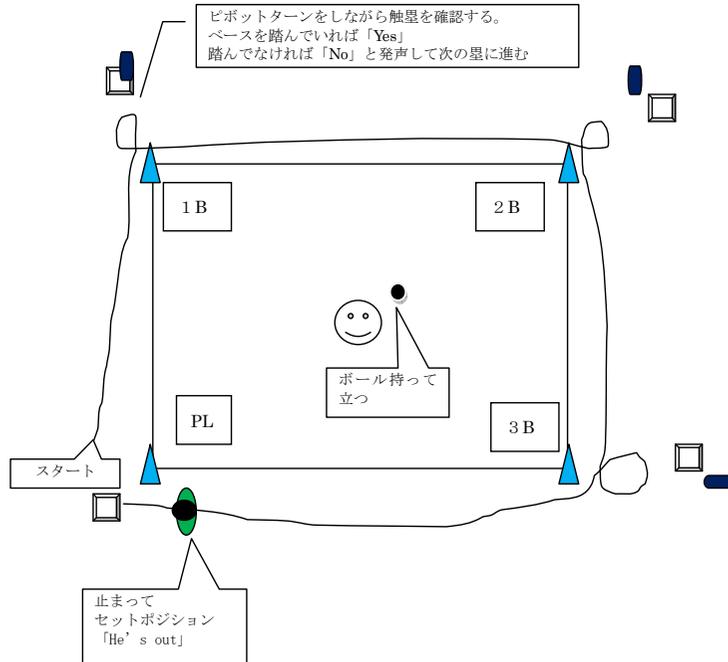
- (ア) 捕手が本塁に進塁してきた走者の走路を塞いだため、走者が得点できなかったと判断したらタイムを掛けて、プレイ全体を止める。
- (イ) 改めて、捕手に走塁妨害を Declare し、走者を安全に本塁に進塁させる。そして、記録員に 1 点入ったことを示す (走者本塁へ、スコア 1 点)。
- (ウ) 続いて、打者走者を 1 塁留めるか、2 塁へ進塁させるか PL と BU で協議する。
- (エ) 塁上の選手同士の衝突は選手生命に危機を及ぼすことから、今年のウインターミティングで議論され 2014 年シーズンから MLB は規制を設けることになった。これを受けて日本も規則改正が行われると思う (コリジョンルール^{*}の採用等)

(7) 走者 3 塁のとき、打者は捕手に打撃妨害されながらも外野に飛球を打った。3 塁走者はタッグアップして本塁に進塁したがホーム寸前でダッグアウトになった。

- (ア) 球審は捕手の打撃妨害の場合は、プレイが止まるまでタイムを掛けないこと。例えば、走者 1 塁のとき打撃妨害が発生し内野ゴロが打たれ 1 塁走者が 2 塁でフォースアウトになってプレイは続けられる。これは 2 塁のピボットマンが 1 塁へ悪送球したことにより、打撃妨害前の状況より攻撃側に有利な状況が生まれるかもしれないためである。この捕手の打撃妨害は「監督の選択権」が生じるため、プレイがひと段落するまで継続することがポイントとなる。
- (イ) プレイがひと段落したら、間髪入れずにタイムを宣告し、捕手の打撃妨害があった旨をコールする。そして、投手の投球当時に占有していた塁に走者を戻す (3 塁走者が本塁でアウト、セーフは問わない)。そして、攻撃側の監督に「プレイを活かすか、走者を戻し打者を 1 塁に進塁させるか」を選択させる。
- (ウ) タイムの時期が遅れると、守備側が 3 塁走者のタッグアップが早かったときにアピールプレイをすることがあり、その行為を見て監督は有利な方を選択してしまうからタイムを掛けるタイミングが重要となる。監督は打者アウトでも得点を優先した場合、プレイ再開後 3 塁走者へのアピールは可能なため、このアピールを 3 塁塁審が認めれば得点は無効にできる。そして、このアピール後攻撃側の監督はやはり走者 1-3 塁でプレイを再開することを求めてもこれは認められない (中央学院大のコーチが平林さんに入念に確認していた。)

※ 審判員の皆様においては、当たり前で当然できるアンパイヤリングかもしれませんが、想定が1球ごとに代わると頭が整理できず走者への進塁を間違えたり、時間が掛ったりしました。

8 ピボットターンしながら触塁を確認するドリル (平林講師)



※ 塁間は10m程度で良い。触塁を確認する以外はセンターでボールを持っているのでボールを見ながら駆け足で移動する。

※ 最後は、止まって「アウト」or「セーフ」の判定をする。

9 座学 (1日目の夕食後)

(1) 講演: 堀井 明氏「U18 World Cupに参加して」BFJ所属

- 今年の8月30日~9月8日に台湾で開催された18歳以下のワールドカップ
- 参加国 A組: カナダ、チェコ、メキシコ、ベネズエラ、台湾、日本
- B組: アメリカ、オーストラリア、コロンビア、キューバ、イタリア、韓国
- 1次リーグは3人制 (国際大会は3人制が一般的)、準決勝から4人制
- 監督・コーチは1試合に3回のタイム可能 (球審のタイムから45秒以内)
- Collision (コリジョン: 衝突) ルールの適用でクリーンな大会となった。
⇒ 不必要かつ乱暴な接触を極力避けさせることを目的に制定。これは本塁に限らず全ての塁で採用される。走者がセーフになっても意図的にぶつかっていった場合、走者のセーフを認める

ものの、その走者は試合から除かれる。

- 国際大会は、なんくせ付けてくる (とくに米国や韓国)。審判員の抗議に対する対応力が試される。そのため高校生であっても退場はある (今大会で2件あり)。

(2) 講演: 平林 岳氏「サムライ審判チャレンジ日記」NPB所属

- MLBは、ルーキーリーグから始まりメジャーリーグまで7段階にわかれている。
- 選手やコーチ、審判員もすべてこの7段階のステージを経験する。
- アメリカと日本のBaseBallの違い
 - ✦ マナーと言うことがMLBでは重要視される。マナーやチームプレイが出来ない選手は技術が優れていてもクビにされる。
 - ✦ よって、マナー違反した選手には報復が待っている。ビーンボールが投げられる。当然PLは投手に退場を宣告するが当たり前のように従う。
 - ✦ 米国の投手はストライクを投げってくる。打者もストライクを打ちに行く。ボール球を投げて打ち取るという日本式のプレイはない。もし、内角にボール球を投げて打者を打ち取ることを必用に続ければ、この捕手に相手の監督は自軍の投手にビーンボールを投げさせることを命じる。日本に来たアメリカ人監督も相手の捕手に「ぶつけろ!」と命令したことがあったと言っていた (パリーグの2月14日監督)。
- メジャーリーガーになるには、より多くの投球を打って成績を上げなければならない。審判もメジャーでPLを何年も行うには多くの投球を見る経験が必要となる。そのため、投手にはどんどんストライクを投げさせる。しかし平林氏はNPBも経験しているのでルールにあるストライクゾーンに正確であるため、ボールが多い判定となり、これでは「選手が育たない」とバッティングコーチから言われたことがあった。
- マイナーの審判員はAAAに上がるまでは2人制が原則。五か月間で140試合 (月に休みは2日程度) 4連戦毎に移動を繰り返すため、自宅には帰れない。移動も最高1晩で600マイルすることもあり体力がいる。移動はすべて自家用車。移動中は眠れない。
- 2人制は全てのプレイをダイヤモンド内 (内側) から見るため、プレイ以外の走者やコーチや野手の雰囲気を読んでジャッジすることもテクニックとなる。
- 4人制になると判定のために動く距離が少なくなる。2人制を経験することで、1番良い位置で判定できるようになる。
- 日本ではルールに明記されていないことは許される行為として黙認される。これでは楽しい野球が出来なくなる可能性がある。楽しくないスポーツを選択する子供がいるだろうか? 野球界発展のため野球をもっと楽しめるスポーツにしなければならない。

(3) 報告: 佐藤 誠氏「MLB Umpire Campに参加して」新潟県硬式野球連盟所属

- 期間: 平成25年11月3日~10日 会場: アーバンユースアカデミー (UYA)
- このCampは通常のアンパイアスクールで5週間のコースを7日間に集約して行うもの。
- 2人制のマニュアルを1日1塁毎に講習する。
- 佐藤氏の報告資料が長文のため全部を紹介できないためトピックスのみ記載
 - 審判員は尊敬を得る対象にならなければいけない。そのため、身なりも重要。
 - 2人制の1BUは、「走者無し」でも「セットポジション」を執る。
 - 球審は①トレイルフットから踏み出し②スロットフットを決める。【日本と逆】

- 内野ゴロの判定の際は、PLは捕手の左側（3塁側）から45Feetを目指す。1BUは、セットポジションからの第一歩目に集中し3秒で判定するポジションに行くこと。
- 【ルール】
 - ◇2.15 キャッチ
 - ⇒時間的な基準はない。ボールを捕って歩き出してから落とした・・・キャッチと見なす。
 - ◇2.76 タッグ
 - ⇒タッグした瞬間ではアウトが確定しない。その後のボール獲捕まで確認して判定。
 - ⇒タッグし後に転倒して、ホールを落球した・・・「ノータッグ」である。
- 1BUは準備投球の間は、一塁手と二塁手の中間の芝生の切れ目で待機する。
- 道具点検は重要である。
 - ⇒「マスク」・・・歪みがあるかチェック。1年で交換するぐらいが良い
 - ⇒「チェスト」・・・喉の下にすき間のあるものは良くない。窮屈くらいがBest!
 - ⇒「シューズ」・・・内面に縫い目のあるものは良くない。
- 【ファウル】・・・「ファウル」と発声。「ファウルボール」とは言わない。
- PLは3塁でプレイが起こると判断し3塁へ上がるとは、ファウルライン上を進みラインを跨いでスタンディングで様子を伺う。プレイが起きると思ったら、内野内へ移動して90°の角度をとり判定する。
- ライト線のフライで3塁走者がタッグアップ。走者が1塁に居るときのPLは1塁線を掛け上がり打球判定を行う。その場で3塁走者のリタッチを確認して、ホームに戻りプレイに備える。（実際にキャンプゲームの中でこのメカニクスが一番難しいと感じました。By古江）

(4) 質疑応答

- Q1：投手がグラブを叩きながら投球した場合のボークとする基準はあるか？
- A1：(NPB：渡田) 阪神の川尻投手が始めた。G 杉内投手が代表選手としてあげられるが、杉内投手がグラブを叩く行為は「投球の一連の動作」として認めている。
- A1：(BFJ：桑原) 毎回同じ動作ならボークを取らなくても良いのではないかと。ただし、打者のタイミングを外す意図があればボークを適用すればよい。
- Q2：投球当時の解釈は、プロとアマに違いがあるはなぜか？
- A2：(NPB：井野) NPBはMLBと同じく、投手が打者に投球したとき（pitch the throw）としている。
- A2：(麻生) 野球審判マニュアル（P125）のあるとおり、アマチュアは投手板に位置したときとしてある。改正論議はあるが、混乱が予想されるため現状のまま理解してほしい。
- Q3：(Q2関連) 走者1塁のとき2塁に盗塁した。その直後「タイム」の要求がありBUはタイムを掛けた。ゲーム再開時の走者はどこになるか？
- A3：(麻生) アマチュアは「オンザラバー」の定義より、走者1塁からプレイを開始することになる。
- Q4：2人制でBUがSS寄りの内野に位置したとき、前進守備をするSSと並んでしまうことがある。その際、SSより移動するように言われたらどうするか？
- A4：(NPB：平林) MLBなら前にです。投手に平行となるかもしれませんが。後ろに下がると2

塁走者の進路を妨害する可能性があり、もっと下がるとダイヤモンド外に出ることになり2人制のシステムが崩れてしまいます。ダイヤモンド内で良い位置を探してください。

Q5：どうしたら若い審判員が増やせるのでしょうか？（23歳福田君）

また、講師のみなさんは審判は楽しいですか？

A5：(NPB：中村) プロは身だしなみに気を使っている。それ以外に人間として振る舞いや尊敬を受けるようになれば若手に指導している。職業として懂れる存在になればよいのではないかと。

A5（麻生）いろいろな改革やスクールの実施をして底辺を広げていく活動が重要。審判していて楽しいかということは、小山委員に聞いてみましょう。

A5：(BFJ：小山) 日本のスポーツ教育の原点が間違っていたのではないかと感じる。大会の選手宣誓で「スポーツマンシップに則って正々堂々と戦います。」というが、「スポーツマンシップ」とは何か？と質問しても答えられる選手はいない。スポーツは殺し合いではない、相手をリスペクト（尊敬）することから始めなければならない。そのためには、自分を磨くことをしなければならない。・・・(It's Justice)

Q6：ライセンス制度の問題点があれば教えてください。

A6：(麻生) 来年の6月をめどに審判員は全て登録してもらおう。そこで、審判員の実数が、団体別、級別に、県別に把握できる。この段階で何か問題点が出てくるかもしれません。この登録に反対している団体もあります。審判員に階級をつけることに抵抗があるという意見もあります。しかし、今のままでは先細りで審判員はいつかなくなるかもしれません。26年度に登録が完了し、27年度からライセンス制をスタートすることが決まっています。すると3年後の30年度には第1回の昇級テストが実施されます。審判員登録はしても何級の申請がなければ全て3級からスタートすることになりますので、さらに上のステージで審判をしたい場合にはこの昇級テストを受けなければなりません。また、登録料は500円/人を払ってもらおうことにしています。

Q7：NPBでは今年何人の選手に退場を宣告しましたか？

A7：(NPB 渡田)YS のバレンティン選手を家族が来日しているときに宣告した。(西本)西武ドームでORIXのイ・デホ選手と森脇監督の二人同時に宣告した。(中村) 私は今年はない。

A7：(NPB 井野) 退場を宣告するときは、審判員に暴言を吐いたときに宣告することがほとんど。

A7：(麻生) アマチュアの国際大会でも、米国や韓国のチームは抗議としていろいろ難癖つけてくる。ゲームマネジメントとして退場も適用しなければならない場面もある。

9 その他

◇ストライクスリー目の捕手の捕球について（トラブル防止）

昨年より、課題であったストライクスリー目の投球を捕手が完全捕球しているかどうかをPLが見えなかったとき、120%自信があるBUがキャッチなら右腕を地面に水平にして「グー」を出し、落球又はショートバウンドなら右手を少し上げ人差し指を地面に指す（トッピングボール、Declare: デクレアをNPBでは今年から取り入れたそうです。マニュアルとして強要しないが、100%でなく120%自信があるときしかBUは示しません。

10 感想（最後に）

昨年度に続いて2回目となる「アンパイアスクール」に参加してきました。今年は2人制を中心としたカリキュラムが当初からアナウンスされていたので、覚悟して臨んだつもりでしたが、予想したとおり体が筋肉痛でバキバキになりました。今回から参加年齢が50歳以下とされた理由がわかりました。班編成も4班で班人数も16人と昨年と違い小隊編成となり休んでいる時間が少なく絶えずどこかで動いている感じでした。

この講習は、まずNPBの審判員が見本としてデモンストレーションを行い、その後受講生が実施して指導を受けるという形式で進められます。NPBの若手（3年未満）の審判員は補助講師として積極的に私たちに指導してくれます。その中で感じるプレイの見方、メカニクスの動きで注意することなどとても参考になりました。やはり、基本である「良い角度、良い位置でプレイに備える」ということがいかに重要であるかが、再認識できました。

私は2人制の試合を経験したことがなく、同じ班員の若い審判員（神奈川県：福田君）から聞きながらの講習を熟しました。もっと、ハンドブックで勉強しておけばと日頃の怠け癖を後悔したところです。桑原氏からは、この2人制ができるようになれば、動きの少ない4人制で「カバーが遅れた。」という言い訳はもう出来ない。と言う言葉がとても印象に残りました。

そして、この講習は失敗しても決して追い込みません。「失敗しても明るく堂々とやれ！」というのがこのスクールの根底にあります。「ここで失敗した経験は絶対に忘れないよ！」という一言がどれだけ次のチャレンジに勇気を与えてくれるか。さらに、良いジャッジをしたときは、「Good Job！」と間髪入れずに講師の方から賛辞を受けます。ハイタッチされていた受講生もいました。

講師の方と交流はフィールド内ばかりではありません。食事と一緒に取りますので、私は夕食のとき、席を先にとってからスープとサラダを取ってテーブルにもどったら、前にNPBの中村さん、左横に待審判の平林さん、右横にNPBの若手審判員に囲まれしまい感激のあまり夕食を完食できませんでした。その時に交した会話も今は貴重な財産となりました。さらに、今年から、座学のあとに懇親会が設定されており、講師の先生もプロ・アマ関係なく全て参加され、日頃聞けない貴重なお話しやデクレアを上手く見せるコツ等も聞けて、寝るのが惜しい夜となりました。

このようなミーハーな報告ばかりで申し訳ないのですが、講習は真摯に受講してきました。来年度の私のアンパイアリングを見て何か変わった？と感じてもらえれば幸いです。

最後に、カリキュラムの最終に行われた各班代表選手による模範演技は、流石！でした。特にアメリカ帰りの佐藤 誠氏は流暢な英語によるコミュニケーションやプレイに対する位置取りは一見の価値あるものでした。

（若干の後悔はジャンケン大会がなかったことです。）

私もこの先短い審判人生ですが、さらにレベルアップするように、そしてリスペクトされる人になれるよう、気持ちを新たに入れ替えることができました。

（春が待ち遠しいオールド審判員からの報告）